

月の花挽歌 ～9. 日日平安～

9-5

話を的外れな内容に展開されたことで鼻白む男優に、次の言葉を用意していたTは適切な距離感で話しを続けた。

「時代劇は用心棒物と人情物とでは、登場人物の色合いが違うんだ。原作の滑稽物に沿って黒澤さんが脚色した第1稿のシナリオが却下されなかったら、今度のリメイク版にしても、君はキャスティングされなかったんじゃないかな - - -。当然のこと『日日平安』は読んでいるよね? - - - そうか、一度目を通しておいても損はないよ。短編だしね」とTは薄笑いを浮かべて言った。

よりによってこんな時に、多事にかまけて原作を読まなかったことへのツケが回ってくるとは思いもよらなかったのも、男優はTに小馬鹿にされても甘んじるしかなかった。

「読んでおきます」と男優はシャンパングラスを目の高さに掲げて照れたように言う。

「例えば殺陣のシーンだったら、大男や小男が入り混じっても撮りようはあるが、貧乏長屋で住人と君との絡みをカメラのアングルやポジションを工夫して撮ったにしてもコメディだったらまだしも、悲劇の人情時代劇の色合いは出しようがない。分かってもらえたかな?」

「勉強になります。次回作で私の出番がありましたらよろしくお願いします」と男優は潔く言って頭を下げることで剣呑な空気の流れを押しとどめた。

Tは表情を緩めて、今思いついたのか、ブランデーをシャンパンで割って、一口飲むとうんうんと頷き、皆にもそうするように勧めるので、同席者たちもこの際だからとTに従うことになり、皆の分を真紀が作り終えるとグラスを合わせた。

「ママ、お抱えバーテンダーを呼んでももらえないかな」とTは逸る気持ちを抑えられずに言った。

顧客の性分を把握している真紀は、理由も訊かずに黒服を呼ぶと、バーテンダーの菜々緒に来るように伝えることを耳打ちした。

典型的な二枚目俳優として、数々の浮名を流し、最近では伯父の性を名乗って監督業にも進出するようになったTを、どこかで侮蔑していたKは、彼の『人情紙風船』に纏わる広い見識を聞かされているうちに、これまでの印象を改めざるを得なかった。老境の域に達していても、人を見る目は危ういものだと遅まきながら痛感した。